



# 〈無垢な被害者〉 イメージと現実

ツバルで地球温暖化報道を考える

こばやし まこと  
小林 誠

首都大学東京大学院社会科学研究所  
博士後期課程

こばやし まこと●専攻は社会人類学、オセアニア地域研究。ジャパンファウンデーションのアジア次世代リーダーフェローとして、2006年3月31日～07年3月30日、地球温暖化に起因する海面上昇による被害が叫ばれているツバルにて調査を行なう。現在は、環境問題の人類学的研究に関心がある。



↑海岸沿いのココヤシ。ココヤシの実はかつて最も重要な食糧の一つであった  
写真提供：筆者（以下も同じ）



**現** 地に行かないとわからないこともある。至極当然のことからの書き出しで恐縮であるが、これが1年間ツバルに滞在した私の率直な感想だ。

ツバルは南太平洋の日付変更線のすぐ西、赤道のすぐ南あたりに位置し、地理的な区分からいうとポリネシアに属する。9つのサンゴ島によって構成される国土の総面積は約26万平方キロメートル、人口は約1万人と世界で最も小さな国の1つである。

この国は日本において、近年、多大な注目を集めており、新聞、雑誌、テレビなどで報道されることが、もはやあまり珍しくなくなってきた。ツバルが報道されるとき、それは必ずといっていいほど地球温暖化という文脈においてである。ツバルは、標高が最高でも数メートルであり、地球温暖化に起因する海面上昇によって〈沈む国〉といわれている。

**ツ**バルは次のように表象されることが多い。

「人々は自給自足的な生活を営み、自然と共生してきた。しかし、近

年、高波、島の浸食、さらには塩害によるタロイモの収穫量の低下といった海面上昇による被害が深刻化している。そもそも、海面上昇の原因は経済を発展させるために先進国が大量に排出してきた温室効果ガスである。ツバルは温室効果ガスをほとんど排出しないにもかかわらず、地球温暖化に起因する海面上昇によって沈没の危機にある」

つまり、ツバルは、自然と共生しているにもかかわらず、地球温暖化の犠牲となる被害者として表象されるのである。ツバルが地球温暖化の被害者である、もしくは、被害者になる可能性があることに異議を唱えるつもりはないが、ツバルの人々の生活が自給自足的であり、自然と共生したものであると一面的に表象されていることに對しては、とまどいを覚える。

**確**かに、ツバルにおいては現在でも漁、豚の飼育、ココヤシの採取、タロイモの栽培といった伝統的な生業活動によって食糧を確保することも多い。しかし、首都のフナフティでは食糧の大部

